

サクラエビ研究のパイオニア、中澤 毅一（その2）

久保田 正

サクラエビ漁業は、明治27（1894）年から現在まで約130年の歴史があり、タカアシガニ漁業やシラス漁業と共に駿河湾の重要な水産業の一つです。本編では、当時の静岡県庵原郡蒲原町字中村の海岸近くに建てた私設の研究所に家族と共に移り住んでサクラエビの研究を行った中澤毅一の性格や人間性さらに家族について紹介します（図1, 2）。

まず、毅一の性格について長男の道夫が編んだ「中澤毅一追憶」によると、直情径行、生一本で一度思い立ったら飽くまで貫徹するという。その反面純情であり、偽りを嫌い、弱きに心を寄せる性格であり、また喜怒の情は激しく、時には強き怒りを発すると共に涙もろいところがあった。日常の生活では贅沢を排し、簡素を尊び、報徳の精神を実施したということを述べています。

毅一の結婚については、大学在学中に父の友人の飯島信明の長女の6歳年下で山梨県英和女学校在学中の娘と早くも婚約が成立されていたとされ、大学卒業の翌年の明治43（1910）年結婚し、当時の東京本郷区駒込千駄木町に住居を構えました。

毅一と妻・春與との間には4男1女の子供がいます。順に長男・道夫、次男・篤、3男・護人、4男・謙四郎、長女・眞知子の5名です。長女の眞知子は、現在94歳になりますが、健康体で都内に住んでいます。そしてこの5名のそれぞれの子供たち（毅一の孫）は、併せて13名ですが、現在10名（男5名、女5名）が存命しています。その内の一人が、宗教学者・哲学者、元中央大学教授の中澤 新一です。

この報文の作成に当り、長女の眞知子さんに父親の印象を、孫の1人である高山達子（静岡市清水区在住）さんと会話しながら思い出して頂きましたので、以下紹介します。

「小さい時蒲原に行くと、父は海岸に毎日地引網で獲れる魚を観に行くので、連れて行ってもらったのがとても楽しかった。また、4年生から6年生の時、父が亡くなるまで母は甲



図1 駿河湾水産生物研究所の建物（昭和3年3月設立）
（当時、静岡県庵原郡蒲原町字中村）



図2 研究所に在住当時（昭和8年頃）の中澤一家
左から春與、眞知子（長女）、毅一、篤（次男）
（志田、1980から引用）

州（現山梨市）にいて、父と東京の家で暮らしていました。その時は怒られることもあったけれど、東京見物にも連れていってもらったりと楽しかったことも多かった。早く亡くなってとても寂しく悲しかった。とても良い父で、優しいけれど、怖く厳しい父でもありました。みんなに優しい人で、特に貧しい人や困っている人にとっても優しく接していました。子犬を拾ってきては、‘ポチ’と名づけて蒲原の研究所で大事に育てていたことが思い出されます。」このように今迄語られていなかったことについて娘さんから見た毅一の一面が明らかになりました。